

源氏物語の絵画性

清水 婦久子

はじめに

源氏物語が数多くの絵画として享受されてきた最大の要因は、物語の文章が、絵を生み出す描写力を持っていたからである。美しく色彩豊かな場面が丁寧に描かれ、登場人物の心情はその風景に託されている。そして日本の古典文学の場合、多くは歌によって人の心情が表されている。また、絵画性・絵画的とは言っても、ただ絵のように美しいのではなく、むしろ絵に描ききれない風の音や波の音が効果的に描写され、それが人の悲哀感や孤独感と重ねられているところも多い。

絵画ゆえ、美術・絵画の描法といった技術の問題として論じられることが多いが、大和絵の場合、図像の中に「記号」として書き込まれるのではなく、物語の本文に書かれた「歌」の素材を絵に写し取る。つまり、登場人物の心情が絵に描かれているわけではなく、絵に描かれたモノを見て、鑑賞者は、その意味に気づき、それを題材にした歌に注目する。あるいは、歌の意味や歌の詠まれた状況を、絵によって知るのである。

源氏物語を描いた大和絵の多くに詞書が添えられているのは、基になったものが文学作品だから、ということだけではなく、言葉と絵とがお互いを活かすものとして表現されるためである。西洋の美術と大きく異なるのは、詞書や歌を書いた「書」それ自体が、絵に負けない美しさを持っていること、その書体や書風や筆跡が心情表現を豊かに表しているという点である。従って、詞書の内容を丁寧に読み取ることは重要で、画帖や絵巻の製作者の意図は詞書に示されている場合も多い。それらを見落とし、絵だけで判断すると誤る。

今回の報告では、源氏物語の絵画性が、和歌の世界を基盤として作られていること、源氏絵の多くが、その和歌的風景や和歌を詠んだ名場面を描いていることに焦点を当て、具体的な絵画作品を示しつつ論じる。

扱った作品は、京都文化博物館『源氏物語千年紀展』の展示作品（図録掲載の図版番号を*で示した）と国宝『源氏物語絵巻』（徳川美術館・五島美術館蔵）である。源氏物語における名場面の本文を引用し、その場面を描いた絵画と物語本文を対照しつつ説明する。図版としては、慶安三年（一六五〇）に初版が出版された絵入り版本『源氏物語』（『源氏物語千年紀展』図録*102）の挿絵①～④を掲載した。

1. 若紫・かいま見（若紫巻）の場面

まず、土佐光起『源氏物語図屏風』若紫・須磨の屏風（福岡市美術館蔵）*24を見てみよう。若紫の図は、有名なかいま見の場面である。

- (1) 日もいと長きにつれづれなれば、夕暮のいたうかすみたるにまぎれて、かの小柴垣のもとにたち出で給ふ。人々は帰したまひて、惟光の朝臣とのぞきたまへば、ただ、この西おもてにしも持仏すゑたてまつりて行ふ尼なりけり。すだれ少しあげて、花たてまつるめり。中の柱に寄りゐて、脇息の上に経をおきて、いとなやましげに読みたる尼君、ただ人と見えず。……清げなる大人ふたりばかり、さては、童べぞ、いでいり遊ぶ。中に、十ばかりにやあらむと見えて、白き衣、山吹などのなれたる着て、走りきたる女ご、あまた見えつる子どもに似るべうもあらず、いみじくおひさき見えて、美しげなるかたちなり。髪は、扇をひろげたるやうに、ゆらゆらとして、顔は、いと赤くすりなして立てり。「何事ぞや。童べと、はらだちたまへるか」とて、尼君の見上げたるに、少しおぼえたる所あれば、子なめりと、見たまふ。「雀の子を、犬君が逃がしつる、伏籠のうちに、こめたりつるものを」とて、いと口惜しと思へり。
- (2) (尼君) 生ひたむありかも知らぬ若草をおくらす露ぞ消えむそらなき
(女房) 初草の生ひゆく末も知らぬまにかでか露の消えむとすらむ
- (3) (源氏) 夕まぐれほのかに花の色を見てけさは霞の立ちぞわづらふ



① 若紫・かいま見（若紫巻）

(4) (源氏) 手につみていつしかも見む 紫の根にかよひける野辺の若草

若紫の垣間見の場面を描いた絵の多くが、波線を引いた幼い紫の上のせりふ「雀の子を、犬君が逃がしつる、伏籠のうちに、こめたりつるものを」に注目している。伏せ籠と雀は、このせりふを端的に表している。若紫の場面とすぐわかるような記号ともなっている。

それだけでない。その場面で(2)の歌が贈答されたことが、この場面の大きなポイントになっている。さらに、後で源氏が詠む歌(3)をも意識して描かれている。(3)の歌の「夕まぐれほのかに」「見て」は、冒頭の「夕暮のいたうかすみたるにまぎれて」に対応しており、「花の色」は紫の上の姿・顔を意味するが、この場面を描いた絵画のいずれにも、桜の花が描かれている。しかも、源氏の視線と少女との間に、必ず満開の桜の木が描かれているのである。これは、絵入り版本『源氏物語』のように、飛び立つ雀や伏せ籠を描かない、物語の場面に忠実な作品においても同様である。

2. 須磨の風景 (須磨巻)

光起の須磨の図は、次の場面のうち、(2)と(3)を同時に描いている。しかし、源氏物語の須磨巻では、こうした絵になる場面だけでなく、絵に表し得ない「音」の風景が文章に描かれている。

(1) 須磨には、いとど心づくしの秋風に、海は少し遠けれど、行平の中納言の、関ふき越ゆると言ひけむ浦波、よるよるはげにいと近う聞こえて、またなくあはれなるものは、かかる所の秋なりけり。御まへに、いと人少なにて、うち休みわたれるに、ひとり目をさまして、枕をそばだてて、四方の嵐を聞きたまふに、波ただこももとに立ちくる心地して、涙おつともおぼえぬに、枕うくばかりになりけり。

(2) 前栽の花いろいろ咲き乱れ、おもしろき夕暮れに、海見やらるる廊に出でたまひてたずみたまふ御さまのゆゆしう清らなること、所からはましてこの世のものと見えたまはず。白き綾のなよよかなる紫苑色などたてまつりて、細やかなる御直衣、帯しどけなくうち乱れたる御さまにて、「釈迦牟尼仏弟子」と名のりて、ゆるるかによみたまへる、また世に知らず聞こゆ。沖より舟どもの唄ひののしりてこぎ行くなども聞こゆ。ほのかに、ただ小さき鳥の浮かべると見やらるるも、心細げなるに、雁の連ねて



② 須磨の風景 (須磨巻)

鳴く声、かぢの音にまがへるをうちながめたまひて、涙のこぼるるをかき払ひたまへる御手つき、黒き数珠に映へたまへるは、ふる里の女恋しき人々の心、みななぐさみにけり。

(源氏) 初雁は恋しき人のつらなれや旅の空飛ぶ声の悲しき

(3) 月のいとほなやかにさし出でたるに、こよひは十五夜なりけり、とおぼし出でて、殿上の御遊び恋しう所々ながめたまふらんかしと思ひやり給ふにつけても、月の顔のみまもられ給ふ

(4) ……例のまどろまれぬ暁の空に、千鳥いとあはれに鳴く。

(源氏) 友千鳥もろ声に鳴く暁は一人寝覚めの床もたのもし

このうち(1)は、特に名文とされるところだが、絵には描けない。絵入り版本『源氏物語』の挿絵②になっている(2)でも、音の風景が中心となっている。経を読む声、舟歌、楫の音、雁の声、音を効果的に表現してある名文である。源氏は沖の舟や雁を眺めているが、供人にとっては源氏の姿や声と沖の舟や雁とが奥行きのある映像になっている。遠景として小さい舟、上空に連なる雁を描く。庭の「前栽の花いろいろ咲き乱れ」る光景(女郎花、藤袴、萩、竜胆、薄などの秋を代表する草花)でつなぐ。挿絵の雁は大きすぎるが、源氏と供人達が雁を歌に詠むので、それを強調する意図もあるのだろう。

3. 源氏物語の評価 (藤原俊成・定家)

須磨の孤独感を表す情景を、藤原俊成や定家は高く評価し、自らもその情景を基にして詠歌した。明らかに須磨の風景の影響を受けたと思われる歌を挙げる。

淡路島かよふ千鳥の鳴く声に幾夜寝覚めぬ須磨の関守（百人一首、源兼昌）金葉集、冬
 旅寝する夢路はたえぬ須磨の関かよふ千鳥の暁の声（拾遺愚草、上、藤原定家）
 見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮れ（新古今集、秋上、定家）
 藻塩くむ袖の月影おのづからよそにあかさぬ須磨の浦人（新古今集、雑上、藤原定家）
 須磨の関有明の空に鳴く千鳥かたぶく月はなれもかなしき（千載集、冬、藤原俊成）
 浦伝ふ磯の苫屋の楫枕ききもならぬ浪の音かな（千載集、羈旅、藤原俊成）

月きよみ千鳥なくなり沖つ風ふけひの浦の明け方の空（新勅撰集、冬、藤原俊成）

初めの「淡路島」の歌は、歌人としては必ずしも評価の不高くない兼昌の歌だが、定家は須磨の情景を詠んだ歌として高く評価し、百人一首に選んだ。定家自身、この兼昌歌を本歌取りして次の「旅寝する」の歌を作っている。また、新古今集の代表歌「見わたせば」は、須磨巻を詠んでいると指摘されてきた歌である。二重傍線部は源氏物語の須磨巻で初めて用いられた言葉であるが、その言葉を定家・俊成ともに多用している。それほどに、須磨の音の風景を、俊成・定家が評価していたことがうかがえる。

藤原俊成の名言、

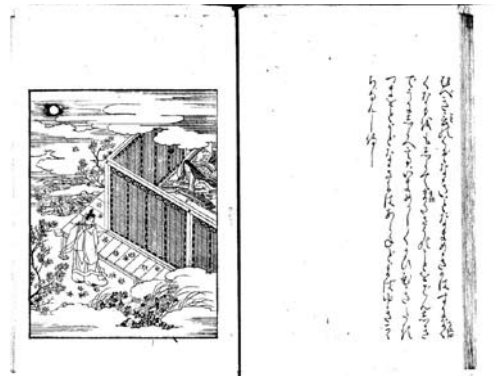
紫式部、歌詠みのほどよりも、物書く筆は殊勝なり。……源氏見ざる歌詠みは遺恨のことなり。（六百番歌合、判詞）

は、単に物語から歌の題材を選べということではない。俊成はむしろ、この歌合の中でも、源氏に偏りすぎる歌を詠んではいけないと戒めている。源氏物語は歌の詠まれた状況をうまく作っているから、それにならって歌を詠めと言ったのだと考えるべきであろう。以後、源氏物語は名作・古典として後世に長く伝えられるに至ったのであるが、そのことは絵画作品にも表れている。

4. 木枯らしの女（帚木巻）

たとえば、光源氏の物語に深く関わらない帚木巻の「木枯らしの女」の場面が、たびたび絵になった理由は、絵になる美しい光景であることも一因であったと思うが、それとは別に、歌の贈答が優れていたことが大きな要因であったと思う。

荒れたる崩れより池の水かげ見えて、月だに宿るすみかを過ぎむもさすがにて下りはべりぬかし。もとよりさる心をはせるにやありけむ、この男いたく



③ 絵入版本 木枯らしの女（帚木巻）

すずろきて、門近き廊の簀子だつものに尻かけて、とばかり月を見る。菊いとおもしろくうつろひわたり、風にきほへる紅葉の乱れなど、あはれとげに見えたり。ふところなりける笛取りいでて吹き鳴らし、「かげもよし」などつづしりうたふほどに、よく鳴る和琴を調べととのへたりける、うるはしくかき合はせたりしほど、けしうはあらずかし。律の調べは女のものやはらかにかき鳴らして、簾のうちより聞こえたるも、今めきたるもの声なれば、清くすめる月にをりつきなからず。男いたくめでて、簾のもとに歩み来て「庭の紅葉こそ踏みわけたるあともなけれ」など、ねたます。菊を折りて、（殿上人）琴の音も月もえならぬ宿ながらつれなき人をひきやとめける「わろかめり」など言ひて、「今ひと声、聞きはやすべき人のある時、手な残いたまひそ」など、いたくあざれかかれば、女、声いたうつろひて、（女）木枯らしに吹き合はすめる笛の音をひきとどむべきことの葉ぞなきと、なまめきかはすに、憎くなるをも知らで、また箏の琴を盤渉調に調べて今めかしくかい弾きたる爪音、かどなきにはあらねど、まばゆきこちなむしはべりし。

美しい光景を描いた場面であるが、それだけではない。この贈答歌が箏と笛の音、池の月影、風に散る紅葉を題材にしているのに対して、多くの絵がそこに注目して丁寧に描いている③。この場面を描いた「留守文様」とされる屏風絵*28では、人物を抜いて、歌に詠まれた題材のみを描く。これは特に歌絵の要素が強い。

5. 野の宮の別れ（賢木巻）

狩野探幽の賢木・滯標の屏風（出光美術館蔵）*29

を見てみよう。賢木巻の野の宮の名場面も、和歌の世界を表している。

はるけき野辺を分け入りたまふより、いとものあはれなり。秋の花みなおとろへつつ、浅茅が原もかれがれなる虫の音に、松風すごく吹きあはせて、そのこととも聞きわかれぬほどに、もの音どもたえだえ聞えたる、いとえんなり。むつまじき御前十余人ばかり、御隨身ことことしき姿ならで、いたう忍びたまへれど、ことにひきつろひたまへる御用意、いとめでたく見えたまへば、御供なるすき者ども、所からさへ身にしみて思へり。ものはかなげなる小柴垣を大垣にて、板屋どもあたりあたりいとかりそめなり。黒木の鳥居どもは、さすがに神々しう見えわたされて、わづらはしきけしきなるに……火たき屋かすかに光りて人気少なくしめじめとして、ここに思はしき人の、月日を隔てたまへらむほどをおぼしやるに、いとみじうあはれに心苦し。……「こなたは簀子ばかりの許されははべりや」とて、上りたまへり。はなやかにさし出でたる夕月夜に、うちふるまひたまへるさま、にほひ似るものなくめでたし。月ごろのつもりを、つきづきしう聞えたまはむもまばゆきほどになりければ、榊をいささか折りて持たまへりけるをさし入れて、「変わらぬ心をするべにてこそ、^{いがき}齋垣も越えはべりにけれ。さも心憂く」と聞えたまへば、
(御息所) 神垣はしるしの杉もなきものをいかにまがへて折れる榊ぞ

傍線部は、絵画として表されるものであるが、この情景でも、絵では表され得ない虫の音や松風が大きなポイントになっている。そして、巻名「賢木」を表し、源氏が榊の枝を差し入れる場面は、古歌を基にした「^{いがき}齋垣も越え」や、御息所の歌を表している。

6. 難波の巡り会い (霽標巻)

同じく狩野探幽の屏風(出光美術館蔵) *29の霽標の図には、物語本文にはない「硯」が描かれていることに注目したい(『源氏物語千年紀展』図録・総論「源氏物語の千年」で詳述)。

かの明石の舟、この響きにおされて過ぎぬることも聞こゆれば、知らざりけるよとあはれにおぼす。……堀江のわたりを御覧じて、今はた同じ難波なると、御心にもあらでうちずじたまへるを、御車のもと近き^{これみつ}惟光……例にならひて^{ふところ}懐にまうけたるつか短き筆など、御車とどむる所にてたてまつれり。をかしとおぼして畳紙に、
(源氏) みをつくし恋ふるしるしにここまでもめぐ

りあひけるえには深しな

※わびぬれば今はた同じ難波なる身をつくしても
あはむとぞ思ふ(後撰集、恋五、二〇、元良親王)

明石の君一行との遭遇と、硯を差し出す場面は別の日の出来事である。このことから、この絵は異時同図を表したものと見るのが一般的だが、むしろ源氏が古歌を口ずさみ、惟光が気を利かして筆を差し出したときに源氏が歌を詠んだという場面に焦点を当てることに主眼があったと考える。その前提には、『源氏小鏡』や『源氏絵詞』の記述があるだろう。

▽常に用意して持ちたる柄短き筆、硯、取り出だして、御車のうちへたてまつる(『源氏小鏡』)

▽明石の舟も難波に入、源、難波の辺りへ行給、惟光、すずり、つか短かなる筆、御車の前へ奉る(大阪女子大本『源氏絵詞』)

7. 哀傷の風景(薄雲巻)

次に、藤壺亡きあとの源氏の悲哀を表した薄雲巻の文章を見てみよう。

殿上人などなべてひとつ色に黒みわたりて、もののはえなき春の暮れなり。二条の院の御前の桜を御覧じて、花の宴のをりなどおぼしいづ。今年ばかりはひとりごちたまひて、人の見とがめつければ、御念誦堂にこもりゐたまひて、日ひと日泣き暮らしたまふ。夕日はなやかにさして、山ぎはの梢あらはなるに、雲の薄く渡れるが鈍色なるを、なにごと御目とどまらぬころなれど、いとものあはれにおぼさる。

(源氏) 入り日さす峰にたなびく薄雲はもの思ふ袖に色やまがへる

※深草の野辺の桜し心あらば今年ばかりは墨染めにさけ(古今集、哀傷、八三二、^{かみつけのみねを}上野岑雄)

この場面については、狩野氏信の五十四帖屏風*3の薄雲巻のような彩色画よりも、絵入り版本『源氏物語』の白黒の挿絵④がその風情をうまく表している。

時は春、桜の花盛りの季節であるが、「殿上人など、なべてひとつ色に黒みわたりて、もののはえなき春の暮れなり」と言う。源氏は、二条院の桜を見て「今年ばかりは」とつぶやく。これは、※に示した古今集の哀傷歌を引いている。深草の桜よ、今年だけは喪服の墨染め色に咲いてくれ、という嘆きの歌である。そのあと源氏は念珠堂にこもって密かに泣き暮らしたが、そこで「夕日はなやかにさして」くる。仰ぎ見ると、山際の梢が夕日に照らされてくっきり見え、そこに雲が薄くかかっている。その雲の色が、喪服の色を表す



④ 哀傷の風景（薄雲巻）

「にび色」なので、源氏は「入日さす」の歌を詠む。源氏の見た光景を「雲の薄くわたれるが、にび色なる」と表し、源氏は、この雲を「薄雲」と表現し、その雲の色を「もの思ふ袖」のようだと感じたのである。

8. 宇治の風景と和歌（浮舟巻）

多くの源氏絵に描かれる「浮舟」図においても、贈答歌とそれを活かす光景が絵に取り入れられている。清原雪信の『源氏物語図』浮舟（板橋区立美術館蔵）*47や岩佐又兵衛の『和漢故事説話図』浮舟（福井県立美術館蔵）*46などである。

いとかなげなるものと明け暮れ見出だす小さき舟に乗りたまひて、さし渡りたまふほど、はるかならむ岸にしもご離れたらむやうに心細くおぼえて、つとつきて抱かれたるも、いとらうたしとおぼす。有明の月すみのぼりて水の面もくもりなきに、「これなむ橘の小島」と申して、御舟しばしさとどめたるを見たまへば、大きやかなる岩のさまして、されたる常磐木のかけ茂れり。「かれ見たまへ、いとかなけれど、千歳も経べき緑の深さを」とのたまひて、

（句宮）年経ともかはらむものか橘の小島の崎にちぎる心は
女も、めづらしからむ道のやうにおぼえて、
（浮舟）橘の小島の色はかはらじをこの浮舟ぞゆくへ知られぬ

句宮が橘の「千歳も経べき緑の深さ」に託して変わらぬ愛を誓う。浮舟は、その深い緑は変わらずとも、「いとかなげなるものと明け暮れ見出だす小さき舟」と思って見ていた不安定な「浮舟」はどこに流されてゆくのかと、これまで流浪してきた我が身の不確かな運命を詠んでいる。この歌により、女は「浮舟」と呼ばれる。句宮・浮舟それぞれが橘と小舟を「いとかな」といものと言いながら、その捉え方には、それぞれの境

遇の相違が表れている。いずれも、小舟に乗る句宮と浮舟、雪に埋もれた橘、それを照らし出す月が描かれている。

9. 源氏物語の歌と巻名

以上のように、「源氏物語千年紀展」で展示した多くの絵画作品が、歌の詠まれた場面、歌の題材を描いている。また、『源氏物語』の歌と巻名とが深く関わっているが、その歌が詠まれた場面がたびたび絵画化されていることにも注意したい。以下、絵に描かれた場面において詠まれた歌のうち、巻名を詠み込んだ歌を挙げる。

心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花（夕顔巻・夕顔）

秋はてて霧のまがきにむすぼほれあるかなきかうつる朝顔（朝顔巻・朝顔宮）

こてふにも誘われなまし心ありて八重山吹を隔てざりせば（胡蝶巻・秋好中宮）

声はせで身のみこがす螢こそ言ふよりまさるおもひなるらめ（螢巻・玉鬘）

なでしこのとこなつかしき色を見ばもとの垣根を人やたづねむ（常夏巻・源氏）

篝火にたちそふ恋の煙こそ世にはたえせぬ炎なりけれ（篝火巻・源氏）

小塩山みゆき積もれる松原に今日ばかりなるあとやなからむ（行幸巻・源氏）

同じ野の露にやつる藤袴あはれはかけよかことばかりも（藤袴巻・夕霧）

山里のあはれをそふる夕霧に立ち出でむそらもなきこちして（夕霧巻・夕霧）

この春はたれにか見せむなき人のかたみにつめる峰の早蕨（早蕨巻・中君）

ありと見て手にはとられず見ればまた行方も知らず消えしかげろふ（蜻蛉巻・薫）

このうち、源氏物語の華やかな行事を描いているように見える胡蝶・行幸の場面においても、実は、歌に詠まれた「胡蝶・来てふ」「行幸・深雪」の掛詞を詠んだ歌をそれぞれ意識して描いている。

10. 『源氏物語絵巻』と和歌

最後に、国宝『源氏物語絵巻』（徳川美術館蔵・五島美術館蔵）を取り上げ、その詞書と絵の両方を示し、詞書の大半に歌が書かれていること、その歌の言葉が必ず絵の中に描かれていることを指摘する。以下、詞書に書かれた歌を挙げる。

尋ねてもわれこそとはめ道もなく深き蓬のものと心

を(蓬生)
行くと来とせきとめがたき涙をや絶えぬ清水と人は
見るらん(関屋)
たが世にか種はまきしと人とはばいかが岩根の松は
こたへむ(柏木三)
おほかたの秋をばうしとしりにしをふりすてがたき
鈴虫の声(鈴虫一)
心もて草のいほりをいとへどもなほ鈴虫の声ぞたえ
せぬ(同)
雲の上をかけ離れたるすみかにも物忘れせぬ秋の夜
の月(鈴虫二)
月影は同じ雲居に見えながらわが宿からのつまぞか
はれる(同)
おくと見るほどぞはかなきともすれば風に乱るる萩
の上露(御法)
ややもせば消えをあらそふ露の世に後れ先立つほど
経ずもがな(同)
秋風にしはし止まらぬ露の世をたれか草葉の上との
み見む(同)
折りて見ばいとどにほひもまさるやと少し色めけ梅
の初花(竹河一)
よそに見てもぎ木なりとや定むらむ下に匂へる花の
しずくを(同)
人はみな急ぎたつめる袖のうらにひとり藻しほを垂
るるあまかな(早蕨)
しほ垂るるあまの衣にをとらめや浮きたる波にぬる
る我が袖(同)
秋はつる野辺のけしきもしのすすきほのめく風につ

けてこそ見れ(宿木三)
さしとむる葎や繁き東屋のあまりほどふる雨そそき
かな(東屋二)
傍線部は、『絵巻』の絵の画面に描かれたものであ
り、絵の多くが歌のことばを絵画化していることは明
白である(『源氏物語絵巻』と和歌)で詳述)。

むすび

以上のように、多くの絵画作品が源氏物語の歌を意
識して描かれている。源氏物語の絵画性とは、単に絵
になる場面が描かれていることを意味するだけでな
く、人の心情を表す歌と深く関わっている。物語その
もの、あるいは絵に添えられた詞書の歌に注目し、そ
の歌を理解すれば絵の内容の理解も深まる。

参考文献

- 『源氏物語の風景と和歌』(和泉書院、一九九七年
二〇〇八年に増補版)
『源氏物語版本の研究』(和泉書院、二〇〇三年)
『絵入源氏 桐壺巻・夕顔巻・若紫巻』(おうふう、
一九九三～二〇〇二年)
『『源氏物語絵巻』と和歌』(新典社『平安文学の新研究
物語絵と古筆切を考える』、二〇〇六年)
『光源氏と夕顔一身分違いの恋』(新典社新書、二〇〇八
年)
『源氏物語千年紀展』図録(京都文化博物館、二〇〇八年)
総論・コラム・図版解説・名場面鑑賞・源氏物語の和歌
(抄)

しみず ふくこ/帝塚山大学 教授